



Title	日本語学習を通して見える学習者の「自己実現」の過程：国際結婚を機に来日した上海出身女性のケース・スタディ
Author(s)	瀬井，陽子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2013, 47, p. 71-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54422
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語学習を通して見える 学習者の「自己実現」の過程

——国際結婚を機に来日した上海出身女性のケース・スタディ——

瀬井 陽子

キーワード：国際結婚／日本語学習者／質的研究／ケース・スタディ／自己実現

1. はじめに

日本における国際結婚夫婦は1980年代後半から急増し、多い年では年間の婚姻件数の約15組に1組が国際結婚夫婦という割合を占めるようになった（厚生労働省 2012）。2010年には国際結婚の総数は3万207組、そのうち夫日本国籍・妻外国籍夫婦は2万2,843組で国際結婚全体の76%を占めている。その中でも、妻の国籍は中国、フィリピン、韓国・朝鮮、タイが88%を占めており、この数字から日本における国際結婚夫婦の大多数は、日本国籍を持つ夫とアジア出身の妻のカップルであると言える。この男女比のアンバランスの原因に関して、「変わる日本人女性の結婚観と変わらぬ社会のジェンダー意識との狭間で生じた晩婚化と結婚率の低下が、結婚人口の性別不均衡をもたらし、それが深刻な農村部では、これを解消するため海外に女性を求める」とためだと伊藤（2007）は述べている。しかし、1995年から2000年に日本に新規で入って来た結婚移民女性の44%は、東京都、大阪府、愛知県、神奈川県、埼玉県に居住している（武田、2008）ことからも、農村部に嫁ぐいわゆる「農村花嫁」以外の国際結婚も増加していることが分かる。

このような状況の中で、富谷・内海・斎藤（2009）は、日本では公的な

日本語学習の場がなく、公的支援のない環境で「日本社会で十全に自己実現するために必要な日本語能力を獲得できるのか (p.118)」「どのように日本社会で自己実現を遂げているのかといった観点からの研究も、まだほとんど行われていない(p.119)」ことを指摘している。

本稿は、上海出身の中国人女性グさん（仮名）のケースから、グさんがどのように日本語を習得し、自己実現を遂げていったのか、それにはどういった要因があるのかを考察することにした。

2. 研究概要

本研究は、半構造化インタビューによりデータを収集した。フリック (2011) によると、質的研究発展史の中で最近はインタビューの中でもオープンなインタビューが関心を集め、実際によく使用されるようになってきた。こうした関心の背景にあるのは、標準化されたインタビューや質問表を用いたときよりも、比較的オープンに組み立てられた（=回答の自由度の高い）インタビューの方が、インタビュイーのものの見方がより明らかになると期待である (p.180)。本研究でも、決められた項目を順次聞いていく構造化インタビューではなく、「インタビューにより予期しなかったこと（リチャーズ, 2009）」を引き出すために、「質問の内容も順番も相手次第によって柔軟に変わる（佐藤, 2002）」半構造化インタビューを行った。

本研究の研究協力者であるグさんは、日本人男性との結婚を機に来日した、4歳¹⁾の娘を持つ上海出身の女性である。インタビューは全4回、合計約5時間のインタビューを行った。詳細は以下のとおりである。

	日時	時間	場所
第1回	2010年11月9日	45分	国際交流財團のフロアの一角
第2回	2011年7月23日	80分	グさんの自宅近くの喫茶店
第3回	2011年12月9日	60分	グさんの自宅
第4回	2012年10月1日	110分	グさんの自宅近くのレストラン

3. 分析方法

質的データの分析は、現象についてのナラティブ的な記述を整理するレベルから、データ全体に共通するカテゴリーやテーマを構築するレベル、さらには理論構築のレベルまでのはば広い範囲にある（メリアム, 2004）。また、ケース・スタディの分析方法は、決まった型があるわけではなく、データの種類やリサーチエクスチョンによってアプローチが変わるため、本研究では、ストーリーを記述することにした。分析手順は佐藤（2008）、フリック（2011）、リチャーズ（2009）、Kvale and Brinkmann（2009）に挙げられている手順を組み合わせて取り入れ、分析結果の記述はナラティブ的な記述について述べているPolkinghorne（1995）を参考にし、以下の作業を行った。

- (1) インタビューの文字化を行う
- (2) 文字化したテキストを会話の話題ごとに区切り、何について話しているかが分かるように「意味の解釈」をつける
- (3) 「意味の解釈」の中から、出来事を時系列に並び替えた表を作成する
- (4) (3) の中で、言語学習、言語選択、仕事、など他の「意味の解釈」との関連がある出来事には共通の印をつけ、因果関係を考察する
- (5) (4) の考察で得られたストーリーを記述していく
- (6) 記述過程で、前後関係のつじつまが合わない部分はデータの中を見直すか、協力者に確認し、ストーリーの完成度を高める

4. 結果

本節では、グさんの日本語学習の過程をストーリーの形で述べる。なお、グさんの日本語学習には来日前の経験が関わっているため、来日前のストーリーからはじめている。

4.1. 来日前

グさんは上海生まれ上海育ちで、両親もまた上海生まれである。グさんが産まれた頃、ちょうど中国で仕事における男女平等が政策として出されていたため、上海では多くの人が夫婦共働きだった。グさんの家も父母とも働き、母は父以上に働いていた。そして、父は母以上に家事ができた。その姿を見ながら、グさんは男性同様に働く女性、家事がよくできる男性、を当たり前のようにして育った。

高校に上がったグさんは、反抗期と独立したいという気持ちから、アルバイトをはじめるが、高校の先生に見つかってしまい、すぐに辞めることになってしまった。グさんは必要なものがあれば親にお小遣いをもらって買える環境で、その時のアルバイトの動機はお金が必要というのではなく、単なる独立心だったのだ。そんなグさんにとって、高校生の時のアルバイトは独立心を満たす方法のひとつだった。後にグさんは様々な仕事に就くが、ご飯を食べることが生きていく上で当たり前なことと同じように、働くということも生きていく上で普通のことだという感覚を持っている。

大学生になり、中国の古典文学を勉強していたグさんは、1回生の時、当時日本から語学留学で上海に来ていた夫と出会う。この時グさんは17歳で、夫は18歳だった。2年の語学留学期間を終えると夫は日本に帰国するが、その後も2人は連絡を取り合っていた。帰国した夫は会社員になり、1年半たった頃にある程度の貯金ができ、結婚を切り出した。グさんも、それ以上長く中国と日本で離れているのは続かないと思い、21歳になる少し前に結婚し、日本に来た。今から振り返ると、年齢的に若かったなとは思うが、結婚自体に後悔はしていない。

4.2. 来日直後

夫とは中国語で話せるということもあり、日本に来たばかりの頃、グさんは全く日本語ができず、「あいうえお」から勉強することになった。結婚し

たばかりの頃は、2人とも若く、日本語学校に行くお金がなかったため、グさんはボランティア教室とテレビと料理の本で日本語を勉強した。しかし、ボランティア教室は日本語で日本語を説明されるスタイルが合わず、理解するのが難しかった。今思い出しても、ボランティア教室で日本語を学んだという感覚はなく、主に言葉を学んだのはテレビからだった。コマーシャルを見ていると、ひとつの単語を印象に残るように強調して言っているし、バラエティ番組なら大きな声で言ったり、言ったことをテロップで見せたりする。テレビを見ながら、どうしてこの部分が強調されたのか、この単語の意味は何なのか、と夫に確認していった。グさんは、テレビ番組を見ながら、夫に中国語で説明してもらうことで日本語を覚えていったのだ。今から振り返ると、夫とは中国語で話せたこともあり、グさんは日本語が話せなくても生活上困らなかつたため、日本語を勉強しはじめるのは遅かったようだ。夫との会話言語は、はじめの2年ほどは中国語のみだったが、グさんの日本語の上達に伴って夫も日本語を話すようになり、その後の約1年はグさんが中国語で話して夫が日本語で返すというスタイルに変わり、その後はお互いに日本語で話すようになっていた。

来日後、グさんは最初の1年半は専業主婦をしていた。日本の生活に不便を感じることはなかったが、家の外で特にすることもなく、次第に退屈に感じるようになっていった。1年半たった頃、日本にいては何もすることがなくて嫌だと思い、上海に一時帰国するために行動を起こす。冬に夏物の服を荷物で上海に送り、上海行きのオープンチケットを買ったのだ。しかし、ちょうどその時、旅行代理店で働いている中国人の友達に人を募集していると声をかけられた。日本で働くなら上海に帰る必要はないと上海行きをキャンセルし、その旅行代理店で働くことにした。

グ：そうそう 働けるんだったら もう帰る必要なくなるじゃないですか それで（上海行きを）やめた キャンセルして

（2012.1.6 グさんインタビュー）

しかし、日本語ができないグさんは仕事もできない、仕事も来ないといった状況に陥り、たった2~3ヶ月でクビになってしまった。その代理店のオーナーは中国人だったが、強烈なキャラクターの持ち主で、物の言い方もひどかった。グさんはその旅行代理店をクビになったことで、はじめて自分で仕事を探さないといけない、と思うようになった。それまでは、自分は日本語ができないから仕事は探せないという気持ちがあり、「中国に帰ってしまおう」という消極的な気持ちを抱いていた。しかし、紹介されたからと受け身で働きはじめた会社で打たれ強くなり、クビにされた状態で終わりたくないという気持ちが生まれてきた。日本語に自信をつけるために、もっと勉強しないといけない、それなら日本語学校に通おうと思い、その学費を稼ぐために働くと考えた。グさんはその時の様子を次のように語っている。

グ：その時までは 自分でアルバイト探そっていう 日本語できないから探せないっていう思いがあったからね だから何も出来なかつた 中国に帰ってしまおうっていうことも考えてしまった
弱かったんですね でそれから自分で 自分で探そって

(20121001-7グさんインタビュー)

4.3. アルバイトをはじめた頃

街の中や広告など、アルバイトの募集はたくさん見かけるものの、実際に電話をするとなると怖くなかった。電話で何を話せばいいか分からない、何より自分の日本語に自信がなかった。夫に代わりに電話をかけてもらえないかと相談したところ、「自分で電話しないと」と言われてしまう。結局、一件は夫が電話をする時に手伝ってくれて面接を受けることができたが、少し家から遠かったこともあり、落ちてしまった。その面接を受けた後、朝からジョギングをしていると、気持ちが爽やかになり、急に「100回電話して

1回でも通ったらしいじゃない」という気持ちが生まれ、その勢いで、ポストに入っていたアルバイト広告を見て電話をかけることにした。まず夫に聞き、何を言えばいいかをメモしてから電話をした。

広告で見つけた工場のアルバイトに応募したグさんは、面接を受け採用された。面接官2人を相手に話をしたが、特に日本語能力を求められる仕事ではないからか、むしろ「日本語が上手ですね」と言われた。工場の仕事は日替わりで箱折り、袋詰め、検品などの作業をしていたが、毎日することは変わるので退屈することはなかった。また、年配の女性が多く手を動かしながら話すこともよくあった。グさんが22、23歳頃のことで、若さもあって思ったことを何でも口にしていたので、もめることもあった。大声で喧嘩になったこともあるたが、その時に相手が引くのを見て、日本人はこんな大声ではやり合わないのだなと気が付いた。工場では、色々なことがあったが、単純な作業でも仕事は楽しかった。この時のことを、後から振り返ってグさんは「工場って言ったらイメージは良くないですけど、でも私は大好き」と話している。

工場の面接を受け、連絡を待っている間、採用されるかどうか分からないと考えたグさんは、普段からよく通っていたファーストフード店でもアルバイトを募集しているのを見つけ、応募の電話をかけた。面接時、自己紹介の後で連れて行かれたのは厨房で、「いらっしゃいませ」などの接客用語を大きな声で言うように言われた。無事面接を終え、採用になったグさんがカウンター業務は自信がないので、厨房で作る仕事がしたいと言うと、厨房は主に男の子がしているし、「グさんカウンターでも大丈夫だから」とカウンター業務を任せてくれた。ファーストフード店の店長には、当時それほど日本語が上手ではなかったグさんを採用してくれたことに今でも感謝している。

接客用語を覚えるのは大変だったが、アルバイト仲間は若い人が多く、暇な時間帯にはよく他のアルバイト達と話し、色んな言葉を覚えていった。グさんは、ファーストフード店のアルバイト経験で一番日本語が上達したと実

感している。採用時の店長から他の店長に変わった時に、「私だったら（まだ日本語がそれほど上手ではないグさんを）採用していない」と言われた。それを聞き、当時、日本語に自信がなく、仕事が見つからないと思っていたグさんを採用してくれ、働く機会、日本語を上達させる機会を作ってくれた店長への感謝の気持ちがより強くなった。

工場とファーストフード店、ふたつの面接に合格したグさんは、月曜日から金曜日の朝から夕方までは工場で働き、平日の6時以降と土日のお昼にファーストフード店で働くという生活をはじめる。

4.4. 日本語学校入学、そして転職

日本語学校の学費を稼ぐためにアルバイトをはじめたグさんは、1年2ヶ月の間、週に6日以上働く生活を続け、念願の日本語学校に入学した。しかし、その学校には留学生向けの進学準備コースしかなく、仕事で使えるような敬語を勉強したいと思っていたグさんのニーズに合ったものではなかった。グさんは、アルバイトを通して、日常生活で話す会話は大体できるという自信がついていた。だから、日本語学校では普段の会話では使わないような硬い表現を学びたかったのだ。しかし、授業では進学するための受験対策や面接対策が行われ、大学進学を目的としていないグさんには意味を持たなかつた。

日本語学校に入った頃、クラスメイト達が日本語能力試験などの試験勉強をするのに影響を受けて、グさんも日本語能力試験を意識するようになった。試験勉強自体は、上海で買った日本語能力試験1級対策の本を読み、分からぬ部分にチェックをして勉強しただけだったが、グさんは初めての受験で1級に合格した。試験を受ける前は、1級に合格すれば自分はとても日本語が上手になるような気がしていた。しかし、普段使わない文法は試験が終わると忘れてしまうし、日常生活では使わない言葉も多い。合格はしたものの、グさん自身に日本語が上達したという実感は生まれなかった。また日本語学校に通っていても受験対策ばかりで、実用性を実感できる授業はな

かった。それに気が付き、1年のコースに入っていたが、先生と相談し、半年で辞めた。

日本語学校を辞め、グさんは本格的にフルタイムで働く仕事に就きたいと思い、求人情報を探し始めた。その時に見つけたのが中国語講師を募集していたA語学学校の求人だった。時給の項目に書かれていた額を見て、条件の良さに興味が湧いたが、中国語を教えた経験がなかったので、自分には無理だろうと応募するのに躊躇していた。それを夫に相談すると、夫はとりあえず履歴書を送ってみるようと言った。

グ：最初 [日本語学校の名前] を辞めて 本格的に ちょっとなんか
就職しようみたいな 働こうと思って（中略）応募しようと思って
その時 [A語学学校] の時給が良かったので こんなに高い時給も
らっていいの みたいな感じで 経験もなかったのに 「とりあえ
ず出してみ」って主人に言われて もう 無理無理って言って私
は言ったんですけど 「出してみたら だめだったら向こうも判断
するから だめだったらダメって」で受かって でそこからはじ
めだしたんですね おーこの仕事面白い こんなに私に合ってる
んだって

(20110723-25 グさんインタビュー)

夫の言葉に後押しされ、だめでも仕方がないという気持ちで応募してみると採用が決まった。求人情報を探していた時はどんな仕事でもいいと思っていたが、実際に中国語を教えてみるととても面白く、自分に合った仕事だと思えるようになつていった。

グさんは、自分は「しゃべりすぎかもしれない」くらいよく話すタイプで、話すことができなかつたら生きていけないと思っている。日本語で会話する時も、間違いがあるかもしれないという不安がなく、しゃべりたいという気持ちの方が強いので恥ずかしがらずに話す。工場とファーストフード店

のアルバイトを通して自分が日本語を上達させられたのはむしろ「間違ってても当たり前だと思ってる」「外国語しゃべってるから間違ってなかつたらおかしい」という気持ちがあったからだ。それは、A語学学校で自分が中国語を教えるようになって、間違いを心配する学習者達にそう言うようになってから気が付いた。

A語学学校で教えはじめた頃、知り合いにある会社の受付で働いてくれないかと頼まれた。中国語を教える仕事の方は、夜間、土日に授業が入ることが多く、平日の昼間ならとグさんは引き受けた。受付の仕事は、9時から4時か5時まで座っているだけでよく、楽な仕事だった。しかし、A語学学校で教えるコマ数が増えたことと、プライベートで中国語を教えて欲しいと頼まれて忙しくなっていったため、受付の仕事は辞めることにした。中国語を教える仕事は時間的にはハードだったが、もともと働くのが好きで、更に中国語を教えるのが楽しいと気づいたグさんには苦にならなかった。娘を妊娠し、9ヶ月になるまでの3年間A語学学校で働いた。

4.5. 出産、そして仕事復帰

2008年3月、グさんは日本で娘を出産した。出産の半月前ぐらいから上海の母に日本に来てもらい、3ヶ月間家のことをしてもらったり娘の面倒を見てもらったりした。その後、ビザの滞在期間の都合で母は一旦上海に帰ったが、1ヶ月後にまた来てもらい、それからの3ヶ月間も日本にいてもらった。

グさんは出産後4ヶ月目に仕事をはじめている。プライベートで、中国語を勉強したいという人に週に1回1時間半の個人レッスンをはじめた。それが週に2、3回に増え、4、5回と増えていった。レッスンをする間は、娘を一時保育に預けた。グさんの中には出産前から子育てだけに専念する専業主婦になろうという気持ちはなく、むしろ出産で一時的に仕事を休むだけという感覚があった。

娘が2歳半になった頃、プライベートの中国語レッスンは続けていたが、1日のうち1時間半だけの稼働時間は暇だと感じるようになり、グさんは再

びフルタイムで働く仕事を探しはじめる。マザーズハローワークを利用し、言語系の仕事で検索したところ、出てきたのは公的機関で働く仕事だった。3ヶ月の短期契約だったが、採用されて働くことになったそこでの仕事は、日本に住む外国人がどういったルートで日本で公的な情報を得ているのかを調査し、報告書を作成するというものだった。はじめは、調査員が中国人にインタビューする際にグさんがついて行って話を通訳するのが主だったが、次第にグさん自身も日本語でインタビューができるからと、中国語話者以外にも直接グさんがインタビューし、内容をまとめるようになっていった。仕事の内容は、データの整理や報告書作成などのパソコン入力はもちろん、実務的なことを全て日本語で行う仕事で、グさんがそれまでにしてきた仕事とは違っていた。これまでにしてきたのは、手作業が主な仕事、決まった接客用語を使うのが多い仕事、中国語がメインとなる仕事であったが、今回の仕事はまさに敬語や硬い表現を必要とする日本語での仕事である。また、読み書きの能力も求められた。

その公的機関での業務は期間契約だったため、3ヶ月で終了するが、グさんは中国語話者であるということと日本語能力の高さを買われ、上司に次の仕事を紹介される。それは日本語のホームページや広告を中国語に翻訳したり、中国へ進出する予定の企業に中国語や中国事情について研修を行ったりするという、より日本語と中国語が密接に結び付いた仕事だった。それまでに中国語を教えたことはあったが、はじめに聞いた業務内容以上に専門知識が必要で、翻訳は何度も辞書を引いて専門用語を調べなければならないし、今まで詳しく述べなかった中国企業の様子などは一から勉強した。会社の中で使われるカタカナ用語などは、辞書を引いても分からぬ言葉も多く、インターネットを使って調べ、一つづつ覚えていった。毎日が忙しく、時間に余裕のない日々を送ることになったが、何よりも鍛えられていると感じた。なお、公的機関での仕事をしていた間も、その次の仕事をするようになってからもグさんは空き時間にプライベートで中国語レッスンを続けている。

5. 考察

本節では、グさんがどのように日本語を習得し、自己実現を遂げていったのか、それにはどういった要因が関係しているのかを考察したい。

「自己実現」とは、心理学者A.H.マズローの自己実現人論、欲求階層説によって著名である（山下，2011）。マズローによると、自己実現とは、「才能や能力、可能性等を十分に用いて開拓していることであり、その人が潜在的にあるべき姿になり、より一層その人特有の姿になり、その人がなることができるもの全てになろうとする傾向が自己実現への欲求である（マズロー, 1971）」とされている。また、「人間には、自分にしかできない固有の生き方をしたい、自分の可能性を最大限に実現したい、という欲求があり、欠乏欲求が満たされた場合それを基礎にして出現していく」とも述べられている。次節で、グさんのストーリーから明らかになったことを挙げ、「自己実現」との関連を述べていく。

5.1. 環境の変化に合わせた自己実現の過程

来日後のストーリーから、グさんの生活環境、こうなりたいという理想像および日本語学習に対する意識を六段階に分けて考えることができる。

一段階目：日本語は話せなくとも生活上困らない専業主婦だったが、家においては何もすることがなく退屈だと感じ、紹介された中国人口オーナーの旅行代理店で仕事を得た。この時点での仕事は、グさんにとって暇な毎日の生活から脱出するための手段であって、家の外で何かをすることがマズローの言う「その人特有の姿」であったと言える。

二段階目：紹介された旅行代理店をクビになってしまった。それにより、日本語ができないから仕事は探せないという考えに変化が起き、日本語に自信をつけるために日本語学校に通おうと思うようになった。ここで、日本語ができなければならないという気づきが起き、欠乏欲求を満たそうとする気持ちが生まれている。

三段階目：日本語学校の学費を稼ぐために2つのアルバイトを掛け持ちする。そのアルバイトを通して日本語を上達させ、日常生活で話す会話はできるという自信をつけた。日本語に関して前段階で生まれた欠乏欲求が満たされていった段階である。

四段落目：念願の日本語学校に入学したが、日本語学校の授業は大学進学を目的としたもので、より実用的な日本語が学びたいというグさんのニーズには合わなかった。日本語の更なる上達という欠乏欲求を満たす方法が足踏み状態となり、グさんの考えに転換が起きる。フルタイムの仕事に就こうと思い、仕事を探しはじめるのだ。雇用条件を見て興味を持ち、就いた中国語講師の仕事はフルタイムではなかったが、中国語話者としてのグさんの能力を生かしたものであり、さらに自分に合った仕事を見つけたという実感を得ることになる。

五段落目：出産後に再びフルタイムの仕事を探し始めたグさんは、天職とも言える中国語講師ではなく、フルタイムで働く方を選択し、公的機関での仕事に就く。そこで仕事は、データ整理や報告書作成など、実務的なことを全て日本語で行う仕事で、ここに来てグさんは前段階で満たせなかつた更なる日本語の上達という欠乏欲求を満たしていく。

六段階目：公的機関での契約が終わり、日本語から中国語への翻訳や中国へ進出する日系企業に研修を行う仕事に就いた。フルタイムの仕事で、かつ辞書を引いても分からぬ日本語に出会う業務は、グさんが求めていた2つの欲求を満たしたものだと言える。忙しくても「鍛えられていると感じた」という言葉から自分の可能性を最大限に実現しようとするグさんの姿勢がうかがえる。

以上、自己実現を遂げていく六段階の過程を見ると、ひとつずつ目の前にある欠乏欲求を満たしていくことで、周りの環境と可能性に変化が起き、次の段階に進んでいくことが分かる。また、はじめから、「潜在的にあるべき姿」に向かって一直線に段階を踏むのではなく、日本語学校を辞めた時のように足踏み状態になり、別の方向に転換することもあると言える。グさんの

ケースでは、約10年かけて六段階のステップを踏んでおり、移住先で日本語という言語の習得と自分の能力や可能性を最大限に使って自己実現しようとするには長い時間がかかることがわかる。

5.2. 自己実現における周りのサポート

グさんの自己実現の過程をたどると、グさん本人の努力以外の要因として、周りのサポートがあったことは注目すべき点である。夫とアルバイト先の店長の言葉は、グさんの行動を後押しし、自信をつけるきっかけとなっている。グさんがアルバイトに応募する時に、夫は自分で電話をかけることをすすめ、かけ方を教えてている。そして、中国語講師の求人への応募を躊躇していたグさんに対して、とりあえず出してみることを勧めた。ファーストフード店の店長は、日本で働くことに自信をなくしていたグさんが面接時「私大丈夫ですかね」と言ったのに対して、「大丈夫大丈夫、グちゃん大丈夫」と声をかけており、気持ちの面で日本で働くグさんを後押ししている。

この2人のサポートは、グさんの行動に介入するのではなく、気持ちの面で行動を後押ししている。人が自己実現を遂げるためには、本人の気づきや努力だけでなく周りの人のサポートも重要であると言えるだろう。

6. おわりに

第1節で、日本では移住者に対する公的な日本語学習の場がなく、公的支援のない環境で自己実現するために必要な日本語能力が獲得できるのか（富谷・内海・斎藤, 2009）という問題を挙げた。グさんのケースは、公的支援を受けず日常生活に必要な日本語能力を獲得しているケースで、日本語能力を上達させたのは、テレビとファーストフード店のアルバイト、仕事における実務経験である。しかし、「日本語学校に行くお金がなかった」ため、ボランティア教室に通い、学費を稼ぐためにアルバイトをしたという語りには、金銭的な負担が少なければ日本語学校に通っていたという意思が読み取

れる。グさんが学費を貯め日本語学校に通いはじめるまでに、来日から3年半以上たっており、移住者の日本語習得が早い時期から公的に支援されるシステムは必要であると言える。また、富谷・内海・斎藤（前掲）は、会話能力は日常生活の中で習得しやすいが、読み書きの能力は難しいと指摘している。中国出身のグさんにとっては、非漢字圏の人に比べると、読み書きに関してはそれほど問題とはならない。しかし、グさんが仕事をする上で必要だと感じていた「敬語や硬い表現」は日常会話の中では上達させることが難しいことが分かる。以上のことをまとめると、公的支援は日常生活を送るためには必要な会話能力、読み書きの能力、ビジネスの場面で必要となる表現、など学習者が置かれている段階に合わせたものが期待される。そして、支援のあり方も、学習者を気持ちの面で後押しするような方法が重要だと言えるだろう。自己実現とは潜在的な可能性を現実化しようとしているから、学習者自身が可能性に気付くところに大きな意味があるからだ。

[注]

1) 最終インタビュー 2012年10月当時

[引用文献、HP]

- 伊藤孝恵 (2007) 「外国人妻の夫婦間コミュニケーションの問題—先行研究の整理から—」『言葉の学び、文化の交流』 山梨大学留学生センター研究紀要2, 山梨大学 pp. 17-24
- ウヴェ・フリック (2011) 『新版 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』 東京: 春秋社
- S.B.メリアム (2004) 『質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー』 京都: ミネルヴァ書房
- L.リチャーズ(著) (2009) 『質的データの取り扱い』 京都: 北大路書房
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法』 東京: 新曜社
- 佐藤郁哉 (2002) 『フィールドワークの技法』 東京: 新曜社
- 富谷玲子・内海由美子・斎藤祐美 (2009) 「結婚移住女性の言語生活—自然習得による日本語能力の実態分析—」『多言語多文化—実践と研究』 vol2、東京外国語大

- 学多言語・多文化教育研究センター、pp.116-137
山下剛（2011）「マズロー〈自己実現の経営〉とY理論」『高松大学研究紀要55・56』
pp.111-151
Kvale, S., Brinkmann, S. (2009) *Interviews: learning the craft of qualitative research interviewing* Los Angeles: Sage
Polkinghorne, D. E. (1995) Narrative configuration in qualitative analysis. In J. A. Hatch & R. Wisniewski (eds.), *Life history and narrative* (pp. 5-23). London: The Falmer Press.

厚生労働省「人口動態調査　夫婦の国籍別にみた年次別婚姻件数」
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat>List.do?lid=000001099728> (2013年5月17日アクセス)

(大学院博士前期課程修了)

SUMMARY

A Learner's Process of 'Self-actualization' through Learning Japanese:
 A Case Study of a Woman who Migrated to Japan
 due to Her Marriage to a Japanese Man

Yoko SEI

International marriages are on the rise in Japan and about 75 % of them are of a Japanese man and a foreign woman. In this paper, I interviewed a Chinese woman named Gu (pseudonym) who is married to a Japanese man, and explored how she has tried to achieve 'self-actualization' through learning Japanese.

Two major findings were obtained from the data analysis. First, Gu's process of achieving 'self-actualization' has not been a linear development. Her circumstances and options have changed over time as her 'deficiency needs' were satisfied one by one. The process sometimes meandered and it has taken a long time.

Second, 'self-actualization' did not entirely depend on Gu's awareness and effort. Support from people around her has been indispensable. Gu's husband and a manager at her workplace played a crucial role at her turning points by providing morale support rather than by behavioral intervention.

Tomiya, Utsumi and Saito (2009) observed that the Japanese government does not provide any support for foreign women married to a Japanese national and most of those women have no opportunity to learn Japanese formally. The findings of this paper suggest that it is not that any support would be helpful, but that support for these women needs to be differentiated according to the development of awareness and concerns of each woman. It is also noted that psychological support has to be offered.